

分析道具としての「反応依存性」理論

その彫琢の試み

千葉 清史(早稲田大学)

今日、イマヌエル・カントの超越論的観念論を、色をはじめとする、ジョン・ロック以来「二次性質」と呼ばれてきたものとのアナロジーによって理解しようとする解釈潮流が存在する。代表者は Tobias Rosefeldt である。このアナロジーを用いることによって彼が目指すことは、カント的「現象」のある意味での主観依存性を認めつつも、超越論的観念論を基本的には実在論的に理解することである。

さて、Rosefeldt が最近の論文(Rosefeldt 2016 and 2022)で明言しているように、彼がカントの超越論的観念論に帰する立場は、今日の分析形而上学において反応依存性 response-dependence 理論と呼ばれているものに相当する。これもまた、価値・道徳をはじめとするさまざまな領域に関して、そこで特徴的なある種の主観依存性を認めつつも、ある種の実在論を保持することを目指すものであり、その典型例として色をはじめとする二次性質が用いられる。

さて、本発表で私が試みるのは、反応依存性理論を用いた超越論的観念論解釈を提示することでも、既存のそうした解釈を検討することでもない。本発表が目指すのは、そうした解釈オプションを展開したり検討したりする際の前提として役立つような仕方での「反応依存性」概念を明瞭化し、また、反応依存性をめぐる今日の議論を参照しつつ、さまざまな領域で適用の可能性が見込めるような分析道具としての反応依存性理論の大枠を提示することである。—— 私自身の関心として、特にカント哲学解釈への適用が第一に念頭に置かれるが、本発表で提案されるような理論的枠組みは、特に主観的なものと客観的なものが交錯する多くの哲学領域(例えば価値論や倫理学、認識論や心の哲学等々)においても有用たり得ることが期待できる。

本発表では特に次の論点が扱われる:

(1) 反応依存性の定式に関わる問題: 一般に、ある概念 F が反応依存的であるとは、それについて以下のような「基本式 basic equation」がア・プリオリに妥当する、ということである:

x は F である $\leftrightarrow x$ は、適切な状況では、適切な認識主観から特定の認知的反応 R を引き出すであろう。(例えば、 x は赤い $\leftrightarrow x$ は適切な状況では適切な認識主観に赤いものとして知覚されるであろう。)

「適切な状況」「適切な認識主観」の特定の性格づけのもとでは、基本式は単にトリヴィアルに真ということにもなりかねない、ということがわかっている。そのような結果に陥らないためには、「適切な状況」「適切な認識主観」はどのように定式化されなければならないか? 本発表はまずこの問いに取り組み、これを通じて「基本式」についての明瞭な理解をまず確立する。

それに続いて私は、特に「実在論」に関わる哲学的考察への適用に留意して、今日の反応依存性理論をめぐる議論における以下の問題を論じていく:

(2) ジョンストン型/ペティット型の区別と、その実在論への関係: 今日の反応依存性理論は「ジョンストン型」と「ペティット型」と呼ばれる二種のものに大別される。これらはどちらもある意味での「実在論」を実現せんとするものだが、その「実在論」に対するコミットメントの度合いは異なる。本発表は、両者それぞれのあり方と、それぞれが実現せんとする「実在論」の内実・強度を明らかにする。(これについては私はすでに千葉 2018 の第二節でく

簡素な説明を提示しておいた。本発表で私は、より詳細で十全な定式を提示することを試みる。)

(3) 全面的な反応依存性をめぐる問題: 反応依存性は、色をはじめとするいわゆる二次性質や、価値的性質等、特定の性質に限定した上で問題とすることもできるが、より一般的に、《およそすべての顕現的性質 manifest qualities》や、《およそすべての時空的性質》が反応依存的だ、と論じることもできる。(特に、反応依存性がカントの超越論的観念論解釈に適用されるならば、カント哲学がそのような主張を行なうものだと解釈されるはずである。)こうした想定は「全面的な反応依存性 global response-dependence」と呼ばれる。

全面的な反応依存性を想定する、とは、実のところ時空的現実をどのようなものと考えることなのだろうか? とりわけ、前項で問題となった実在論との関係はどうなるのだろうか? 実際、全面的な反応依存性が想定される限り、実在論は維持できない、と主張する論者が存在する(例えば Devitt 2010)。

これに対し、私は次のように論じるであろう:ジョンストン型の反応依存性理論に基づく全面的な反応依存性の想定は、実在論を維持しえない。それに対し、ペティット型の反応依存性理論を採れば、全面的な反応依存性の想定のもとでも一定の「実在論」的要件を認めることができる。

(4) いわゆる “Missing Explanation Argument” について: これは、Johnston 1989 で最初に提起され(また Johnston 1998 でさらなる改良版が提示され)た議論であり、《反応依存的であるような性質は、知覚における因果的説明において適切な役割を果たすことができない》と論じるものである。(例えば、我々の色概念「赤い」が反応依存的であるとすれば、我々は、あるものを我々が赤いものとして知覚することの経験的説明として、「そのものが赤いからだ」ということを挙げるができなくなる[がそのようなことはおかしいので、「赤い」は反応依存的概念ではありえない]、ということになる。)この議論がもし正しいとすれば、それは、「反応依存性」概念を用いてある種の実在論的存在論を説明しようとする試みにとって大きな障害となるであろう。

この批判的議論に対し、「反応依存性」を擁護する多くの議論が提示されてきた。本発表はこれらの代表的なものを検討し、“Missing Explanation Argument”とはいったい何だったのか、それが、実在論体系構築への反応依存性理論の適用にどのような問題を提起しうるのであるのか、ということをはっきりとすることを試みる。

千葉清史 2018: 「超越論的観念論と反応依存性:その反-懐疑論的帰結」、『思想』1135号, 143-159.

Devitt, Michael 2010: “Global Response-Dependency and Worldmaking”, in his: *Putting Metaphysics First*, Oxford University Press, 121-136.

Johnston, Mark 1989: “Dispositional Theory of Value”, *Proceedings of the Aristotelian Society, Suppl. Vol.* 63, 139-174.

--- 1998: “Are Manifest Qualities Response-Dependent?”, *The Monist* 81, 3-43.

Rosefeldt, Tobias 2016: “Closing the Gap: A New Answer to an Old Objection against Kant’s Argument for Transcendental Idealism”, *Proceedings of the Aristotelian Society* 116(2), 181-203.

--- 2022: “Being Realistic about Kant’s Idealism”, Karl Schafer/Nicholas Stang (eds.), *The Sensible and Intelligible Worlds*, Oxford University Press, 16-44.